日本フランス語フランス文学会

2018 年度秋季大会

2018 年 10 月 27 日（土）・10 月 28 日（日）

会　場：新潟大学 五十嵐キャンパス 総合教育研究棟 B 棟
〒950-2181　新潟市西区五十嵐二の町 8050 番地

第1日　10月27日（土）

受　付　11：30～18：00　総合教育研究棟 玄関ホール

開会式　12：45～13：00　B255教室
司会　逸　見　龍　生（新潟大学）
開会の辞　石　野　好　一（新潟大学）
開催校代表挨拶　齋　藤　陽　一（新潟大学人文学部長）
会長挨拶　石　井　洋二郎
（東京大学理事・副学長、東京大学名誉教授）

研究発表会　総合教育研究棟B棟　各教室
第1部　13：10～14：10　　第2部　14：20～15：20

特別講演 1　15：30～16：40　B255教室
Sophie Duval (Université Bordeaux Montaigne)
« Du Moyen Âge de 1913 au Moyen Âge de 1919. Combray, Chartres, Reims et l'art gothique dans *À la recherche du temps perdu* »
司会　津　森　圭　一（新潟大学）

特別講演 2　16：50～18：00　B255教室
Catherine Volphilac-Auger (ENS de Lyon)
« Montesquieu : entre Grand Siècle et Lumières »
司会　逸　見　龍　生（新潟大学）

懇親会　19：00～21：00
会場：ホテルイタリア軒　3階　サンマルコの間
住所：〒951-8061新潟市中央区西堀通7番町1574番地
Tel：025-224-5111
会費：正会員A：5,000円
正会員Bならびに学生会員：3,000円
＊大会会場から懇親会場への移動手段：会場の入口を出て左手の広場前から18時以降に送迎バスが出発します。

研究会　10月27日（土）10：00～12：00
18世紀フランス研究会　B358教室
自然主義文学研究会　B356教室

第2日　10月28日（日）

受　付　9：30～15：00　総合教育研究棟 玄関ホール

ワークショップ　総合教育研究棟B棟　各教室
第1部　10：00～12：00　　第2部　13：00～15：00

総　会　15：15～16：45　B255教室
議長　星　野　　徹（埼玉大学）

閉会式　16：45～16：55　B255教室
会長挨拶　石　井　洋二郎
閉会の辞　石　野　好　一

大会本部：新潟大学人文学部津森圭一研究室
（五十嵐キャンパス総合教育研究棟 A 棟 6 階 A624）
お問い合わせ先：Tel：025-262-6389
e-mail：tsumori@human.niigata-u.ac.jp
大会当日連絡先：Tel：080-4385-2696
一般控室：B253 教室
研究発表会司会者控室：B352 教室
賛助会員展示会場：B254 教室

- 大会費：1,000 円
- 懇親会費：別紙「大会費等の振込について」を参照
いずれも同封の払込取扱票にて、**10 月 12 日（金）**までにお振込みください。
- 大会参加にあたり、招請状の必要な方は学会事務局（sjllf@jade.dti.ne.jp）までご請求ください。
- 委員会・役員会については、各委員長・幹事長よりご連絡いたします。
- 会場周辺は飲食店が少なく、10 月 27 日・28 日ともお弁当（各 1,000 円）をご用意しますので、ご希望の方はお申込みください（昼食引渡所：一般控室）。
- 会場で託児サービスを希望する方は、同封の案内をご覧の上、メールにて **10 月 12 日（金）**までにお申し込みください（宛先：tsumori@human.niigata-u.ac.jp）。

研 究 発 表 会 プ ロ グ ラ ム　10月27日（土）

	第1部（13：10～14：10）	第2部（14：20～15：20）
A会場 B251 教室	語学 ① 司会：金子 真（青山学院大学） 1. 接続法における語用論的機能―陳述様態からの分析 井上 大輔（上智大学大学院博士後期課程） 2. 従属節中の文体的倒置にみる従属節の従属度と焦点 谷口 永里子（京都大学大学院博士後期課程）	語学 ② 司会：金子 真（青山学院大学） 1. 罵り表現としての « espèce de ... ! » に関する考察 楊 鶴（筑波大学大学院博士課程）
B会場 B351 教室	16世紀・17世紀 司会：相田 淑子（中央大学） 1. フランスにおけるトラジェディーとエレジーの関係性―エティエンヌ・ジョデル『囚われのクレオパートル』(1552) と同時期に書かれた数篇のエレジーをめぐって 鈴木 彩絵（上智大学大学院博士後期課程） 司会：武田 裕紀（追手門学院大学） 2. ピエール・ベールと歴史批評―マルブランシュ、ポール・ロワイヤルとの関連で 谷川 雅子（日本学術振興会特別研究員 PD）	18世紀 司会：川村 文重（慶應義塾大学） 1. 十八世紀フランスにおける自伝的「私」の多層性 石田 雄樹（東北大学助教） 2. ヒエログリフと演劇―1750年代のディドロ 川野 惠子（パリ第三大学客員研究員）
C会場 B353 教室	19世紀 ① 司会：岩切 正一郎（国際基督教大学） 1. 1830年、古典主義とロマン主義 鈴木 和彦（白百合女子大学非常勤講師） 2. ボードレールにおけるホフマンの影響―「熱狂的旅人」を巡って 清水 まさ志（宮崎大学准教授）	19世紀 ② 司会：中島 太郎（中京大学） 1. 『ボヴァリー夫人』と版画―イメージからテクストへ 木内 堯（日本学術振興会特別研究員-PD） 2. アンリ・ミュルジェールとジャーナリズム 辻村 永樹（早稲田大学非常勤講師）
D会場 B354 教室	19世紀 ③ 司会：倉方 健作（九州大学） 1. 詩篇「エーリンナ」にみる1860年代バンヴィルのリリスム 五味田 泰（慶應義塾大学非常勤講師） 司会：寺田 寅彦（東京大学） 2. 『田舎教師』とゴンクールの小説 山本 武男（慶應義塾大学専任講師）	19世紀 ④・20世紀 ① 司会：福田 裕大（近畿大学） 1. 超自然への関心と科学普及活動―ルイ・フィギエ『近代における驚異の歴史』 槙野 佳奈子（日本学術振興会特別研究員） 2. フランスの近未来戦争小説について―普仏戦争以後の文化と科学技術の観点から 佐藤 正尚（東京大学博士後期課程）
E会場 B356 教室	20世紀 ② 司会：中島 淑恵（富山大学） 1. サッフォーを「創る」ルネ・ヴィヴィアン―訳詩集における排他的な同性愛者としてのサッフォー像 長澤 法幸（早稲田大学大学院博士後期課程） 司会：中筋 朋（愛媛大学） 2. アントナン・アルトーにとっての「悲劇」について―「残酷演劇」の必然性と自由 大坪 裕幸（立教大学教育講師）	20世紀 ③ 司会：永井 敦子（上智大学） 1. 見えない網―マルロー『王道』における冒険と未帰順部族 井上 俊博（大阪大学非常勤講師） 2. 『Oの物語』におけるフクロウの仮面―マンディアルグと「仮面」をめぐる一考察 松原 冬二（京都大学文学研究科研究員）
F会場 B358 教室	20世紀 ④ 司会：本田 貴久（中央大学） 1. 演劇性への逸脱―ミシェル・レリス『ゴンダルのエチオピア人における憑依とその演劇的諸相』とジョルジュ・バタイユ『ジル・ド・レ裁判』 吉田 隼人（早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程） 司会：奥 純（関西大学） 2. ロブ＝グリエのエクリチュールにおける演劇と翻訳―「舞台」を題材に 木村 仁志（筑波大学大学院博士課程）	20世紀 ⑤ 司会：ローベル 柊子（東洋大学） 1. 小説の作者であること―ミラン・クンデラにおける自作への言及 篠原 学（東京大学非常勤講師） 司会：谷 昌親（早稲田大学） 2. マリー・ンディアイ作品における母親の「大食」―女性の自己形成をめぐって 今野 安里紗（筑波大学大学院一貫制博士課程）
G会場 B258 教室	20世紀 ⑥ 司会：澤田 直（立教大学） 1. エマニュエル・レヴィナスの『誘惑の誘惑』における「理解する（聞く）より前に行う」(faire avant d'entendre) という概念について 時田 圭輔（慶應義塾大学大学院博士後期課程） 2. 『分析手帖』と『マルクス＝レーニン主義手帖』―1960 年代フランスにおける学知、革命、文学 坂本 尚志（京都薬科大学准教授）	20世紀 ⑦ 司会：遠藤 文彦（福岡大学） 1. 「快楽」と「中性」―ロラン・バルト『テクストの快楽』について 金谷 壮太（筑波大学特任研究員）

特　別　講　演　1　　10月27日（土）　15：30～16：40
B255 教室

Du Moyen Âge de 1913 au Moyen Âge de 1919.
Combray, Chartres, Reims et l'art gothique dans *À la recherche du temps perdu*

Sophie Duval (Université Bordeaux Montaigne)

Il est bien connu que Proust a déplacé le village de Combray pendant la Grande Guerre. Quand il a publié *Du côté de chez Swann* en 1913 chez Grasset, Combray se localisait en Beauce, près de Chartres. Quand il a republié *Du côté de chez Swann* en 1919 chez Gallimard, Proust n'a pas hésité à légèrement retoucher le texte pour transplanter Combray en Champagne, non loin de Reims, dans la zone des affrontements. Combray a ainsi quitté les environs de la cathédrale de Chartres pour venir à proximité de la cathédrale de Reims.

On connaît aussi l'issue de ce transfert : dans l'épisode de la guerre, qui a pris place dans *Le Temps retrouvé*, les combats font rage à Combray, et son église médiévale, Saint-Hilaire, est détruite. Or, en septembre 1914, les Allemands bombardèrent la cathédrale de Reims. L'incendie et la destruction partielle de Notre-Dame de Reims ont alors provoqué une guerre de propagande entre historiens de l'art français et allemands au sujet de l'art gothique. Depuis longtemps déjà, la France et l'Allemagne se disputaient son invention. En 1914, cette querelle a rebondi, et l'art gothique s'est retrouvé au cœur du conflit : il était devenu, pour les Français, l'emblème de la nation, et le coup porté à la cathédrale de Reims était considéré comme une tentative de destruction délibérée de l'identité, du génie et de l'âme de la France. Émile Mâle, inspirateur du Moyen Âge proustien avec John Ruskin, joua un rôle central dans la polémique franco-allemande du gothique.

C'est à la lumière du bombardement de la cathédrale de Reims et des publications antiallemandes de Mâle que l'on peut tenter d'évaluer les parts chartraine et rémoise des monuments médiévaux de Combray, de comprendre pourquoi Proust a déménagé Combray et détruit son église, et de voir comment le Moyen Âge gothique a pu changer de signification dans *À la recherche du temps perdu* entre 1913 et 1919.

特　別　講　演　2　　10月27日（土）　16：50～18：00
B255 教室

Montesquieu : entre Grand Siècle et Lumières

Catherine Volpilhac-Auger (ENS de Lyon)

Les œuvres de Montesquieu sont inaugurales : les Lumières s'ouvrent avec les *Lettres persanes* (1721), le temps des combats philosophiques avec *L'Esprit des lois* (1748). Pourtant Montesquieu ne se mêle pas à ces combats, et ne se dit pas « philosophe », mais « homme de lettres » ou « écrivain politique ». Né en 1689, il est profondément marqué par le règne de Louis XIV ; imprégné de la culture du XVIIe siècle, attaché à Descartes, familier de salons aristocratiques où l'on ne parle ni philosophie, ni politique, il vit aussi passionnément l'époque qui est la sienne. Solitaire et souterrain, son travail intellectuel se nourrit de ces tensions entre deux époques, entre deux mondes. Je serai ainsi amenée à revenir sur l'objet insaisissable que sont les « Lumières », souvent implicitement définies à partir d'un corpus postérieur à 1750 : Montesquieu participe pleinement d'un mouvement qui s'enracine dans le XVIIe siècle et qu'il oriente vers de nouveaux objets, guidé par des valeurs esthétiques, politiques et philosophiques qui trouveront plus ou moins d'écho après 1750.

ワークショップ　第1部　10月28日（日）　10：00～12：00

ワークショップ１　B353 教室

見えるもの、見えないもの—19 世紀幻想文学再考—

コーディネーター・パネリスト：梅澤 礼（富山大学）
パネリスト：中島 淑恵（富山大学）、足立 和彦（名城大学）

フランスにおける幻想文学は、1950 年代のカステックス、60 年代のカイヨワの研究によって注目された。その流れを決定的なものにしたのは、幻想とは「怪奇」と「驚異」の間の「ためらい」であるとしたツヴェタン・トドロフであった。しかしそのトドロフも 2017 年に亡くなり、2018 年度刊行の *LITTERA* 第 3 号においてピエール・グロードは、トドロフの理論がいくつもの問題点を抱えていることを指摘している。

そこで本ワークショップでは、発表以来 50 年を迎えようとするトドロフの理論をいったん保留し、我々自身の視点から幻想文学を読み直すことを試みたい。具体的には、19 世紀幻想文学を代表するメリメ、ゴーチエ、モーパッサンの作品を取り上げ、主に「視覚」の観点から幻想の表象を考察する。それぞれの作品において、不可解なものはどのように知覚されるのだろうか。

梅澤はメリメの『煉獄の魂』が、見える恐怖だけでなく見えない恐怖によっても支配されていることに注目し、この「視覚」以外で感じられる事物によって作品世界の整合性がどのように保たれているのかを考える。中島は、ゴーチエの『死霊の恋』において、死霊との直接的接触（触れられる、交わる、血を吸われるなど）によって喚起される違和感について考察することから、幻想文学における幻覚について検討を加えたい。そして足立は、モーパッサンにおいて「見えないもの」がなぜ恐怖の対象となるのか、「見えないものを見る」というアポリアは何を意味するのか、『オルラ』に至る作品を通して考えることで、実証主義の時代の恐怖を分析する。

幻想は実に幅広い主題である。会場との活発な意見交換を通して、幻想文学を再考する可能性と意義について、多くの研究者と認識を共有できれば幸いである。

ワークショップ２　B351 教室

近代フランス美術と文学—その照応と対立のダイナミズム

コーディネーター・パネリスト：津森 圭一（新潟大学）
パネリスト：太田 みき（明治学院大学）、熊谷 謙介（神奈川大学）、畠山 達（明治学院大学）

姉妹芸術と呼ばれる文学と絵画については、従来その一致する点に強い関心が寄せられてきた。一方で、両者の照応のみならず対立を含む相互作用のダイナミズムについて十分に議論されてきただろうか。本ワークショップでは、フランス 19 世紀前半から 20 世紀初頭にかけて、美術批評、小説、詩、日記、書簡などのメディアで「美」が語られるメカニズムを、文学研究と美術史研究の両方の立場から双方向的に再考する。とくに、当時文学が美術批評をその下位ジャンルとして取り込む一方で、美術が文学の影響に抵抗を見せるという現象に着目しつつ、ロマン主義から象徴主義までの芸術潮流において「諸芸術の交感」の言説がいかに変化していったかを検証したい。

太田は詩に依って絵画の価値を主張する伝統的理論を確認した後、時間芸術と空間芸術を明別したレッシング以降、絵画独自の「語り」を追求する過程で、物語画がどのように変質していったかを、ロマン主義、アカデミスム、象徴主義から事例を挙げて考察する。

畠山は、まず 19 世紀の中等教育における詩と絵画の関係に着目し、規範の生成と伝統の継承という問題を確認する。次に、ボードレールがその規範/伝統にどのような変革をもたらしたか、詩作品及び美術批評などを通して複層的に考察してみたい。

熊谷は「象徴主義」的言説の囲い込みに対して美術が抵抗を示したことを、オーリエの美術批評「絵画における象徴主義」を事例にして確認するとともに、その文学的バイアスに秘められた象徴主義再編の可能性を示唆する。

津森は小説家プルーストと画家ボナールがともに、ある「感覚」体験を作品で再現するときには必然的に時間差が生じ、「思い出」（souvenirs）の力に頼ることに自覚的であったことに着目する。

ワークショップ　第2部　10月28日（日）　13：00～15：00

ワークショップ３　B251 教室

転位するディドロ（Diderot en déplacement）—ディドロの政治・道徳論の新たな読みに向けて

コーディネーター：逸見 龍生（新潟大学)
パネリスト：王寺賢太（京都大学）、イ・ヨンモック（ソウル大学）、シャルル・ヴァンサン（京都大学）

ディドロという思想家・作家をめぐる近年のアプローチは、ますます多岐におよぶものとなった。それに伴い、従来の解釈におけるディドロ像も大きな修正を迫られている。このワークショップでは、日韓仏の研究者たちを招き、それぞれの専門的立場からディドロのテクストの読みを提出し、2013 年のディドロ生誕 300 周年から 5 年後の本年、現代のディドロ解釈の地平をあらためて捉え直すことにしたい。

中心となるのは、ディドロにおける政治・道徳論である。従来、たとえばルソーに対して政治的急進性において〈退行的〉とすらしばしば評されてきたこの百科全書派の政治的思考は、果たして真にそのようなものだったのか。テクストとコンテクストの周到な読みを通じて、あるいはこうした観点とは異なる相貌が現れてきはしないか。

パネリストは後期ディドロ政治思想、特に『両インド史』の解読を進めてきた王寺賢太（京都大学）、やはりディドロの政治思想、特にその 18 世紀ジャンセニスムの神学政治論的言説との関係の分析から出発、近年では哲学的コントの新たな読みの可能性へと研究領域を進めてきたイ・ヨンモック（ソウル大学）、後期ディドロの倫理思想をその晩年のセネカ論（『クラウディスとネロの治世』）を中心に解明しようとしているシャルル・ヴァンサン（京都大学）の三名である。発表はすべてフランス語で行われる。会場との活発な議論を期待したい。

ワークショップ４　B353 教室

マラルメと20世紀の詩人たち—没後120年目に振り返る—

コーディネーター・パネリスト：坂巻 康司（東北大学）
パネリスト：中山 慎太郎（学習院大学）、太田 晋介（大阪大学）

2018年は象徴主義詩人ステファヌ・マラルメ（1842-1898）の没後120年目に当たる。この詩人が20世紀全体に亙って、文学・哲学・音楽を代表する人物たちに多大な影響を与えたことは夙に知られている。仏文学会ではすでに2014年の秋季大会において『哲学者が語る複数のマラルメ像』というワークショップを開催し、デリダ、ドゥルーズ、ランシエールといった20世紀を代表する哲学者たちに与えたマラルメの影響を検証したが、今回は詩人たちの創作活動そのものに与えたインパクトを検証してみたい。マラルメと20世紀思想との関連性は比較的明らかになっているものの、詩人たちの創作自体にマラルメの詩学が直接的にどのような影響をもたらしたのかという点に関しては、これまでの研究において、必ずしも詳らかにされたとは言えないからである。

そのような観点から、本ワークショップは以下のように進めて行く。まず、坂巻は、マラルメに対する批判的姿勢から詩作を開始したイヴ・ボヌフォア（1923-2016）の試みの当否を改めて検証する。続いて中山は、ボヌフォアと同様に長年月に亙って詩を書き続けて来たジャック・デュパン（1927-2012）の詩作にマラルメからの影響があるのかどうかを探る。最後に太田は、全く独自の境地に辿り着いたと思われるフランシス・ポンジュ（1899-1988）の詩作とマラルメの思想を比較検討する。

マラルメという19世紀後半を代表する詩人が、20世紀から現代に至るフランス詩の流れの中でどのような位置を占めるのかということを改めて問うことは、近現代フランス文学の全体像を見極める上で欠かすことのできない作業であろう。当日は会場からも刺激的なご意見を伺うことが出来ればと考えている。

ワークショップ５　B351 教室

ラスキンとフランス

コーディネーター：和田 恵里（青山学院大学）
パネリスト：横山 裕人（成蹊大学）、加藤 靖恵（名古屋大学）、荻野 哉（大分県立芸術文化短期大学）

2019 年はジョン・ラスキン生誕百年に当たる。フランス文学に関わる者たちの間では、マルセル・プルーストが小説家としての地盤を築く過程でこの作家から深く影響を受けたという文脈で語られることが多いのだが、今回このワークショップでは、一旦プルーストとの関係という枠組みを外すことで、フランスの社会、文化、芸術とラスキンがどのように関わったのかをあらためて問い直すことを目的とする。

横山は、フランスにおけるラスキン受容の変遷を書誌的に辿り、ラスキンの思想がどのように解釈され、議論や批判の対象となったか、あるいは社会の中に吸収されていったかを検証するための基本的データを呈示する。従来重視されてきた絵画論、建築論のみならず、労働運動や環境保護といったテーマも視野にいれつつ、フランスにおけるラスキン受容の多様性と意外な広がりを示したい。

荻野は、『モダン・ペインターズ』や『ヴェネツィアの石』といった前期の代表的著作から、後期の美術講義にいたるラスキンの芸術観の変遷を、想像力をめぐる議論などを手がかりにしつつ考察する。その際、19 世紀後半のイギリスで展開した唯美主義（運動）の内実、およびラスキンとその動きとの関係を視野に入れることによって、同時期のフランスの思想との差異も示したい。

加藤は、ラスキンといういわば異国人の目を通して再発見されたフランスの中世カトリック美術（建築と彫刻）に注目する。宗教、偶像崇拝、中世の復権をキーワードとして、フランスにおける図像学的貢献という視点からラスキンが果たした役割を、アミアン、リジューなどの教会建築の映像を交えて明らかにした上で、仏訳『アミアンの聖書』の序文に展開されるプルーストのラスキン論を再考察する。

日本フランス語フランス文学会 2018 年度秋季大会　託児サービスのご案内

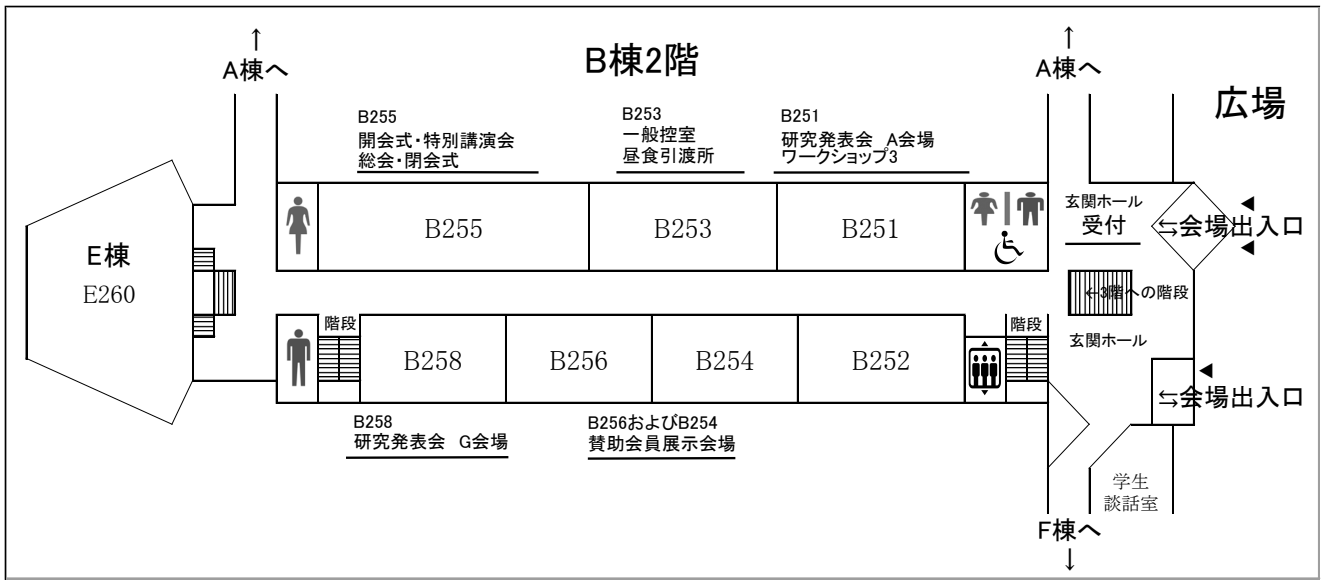
開設日時	2018 年 10 月 27 日（土）11：00～18：30 2018 年 10 月 28 日（日）　9：30～17：00
場所	新潟大学五十嵐キャンパス内男女共同参画推進室プレイルーム
委託先	株式会社 POPO ポッポ　http://www.po-po.net/
申込方法	大会実行委員会アドレス（tsumori@human.niigata-u.ac.jp）までご連絡ください。折り返し「託児室利用申込書」をメールにてお送りいたします。
申込締切	10 月 12 日（金） 注意：収容人数の関係で、1 日あたり 5 名程度のお子様の申込をいただきましたら締め切らせていただきますので、早目にお申込みください。

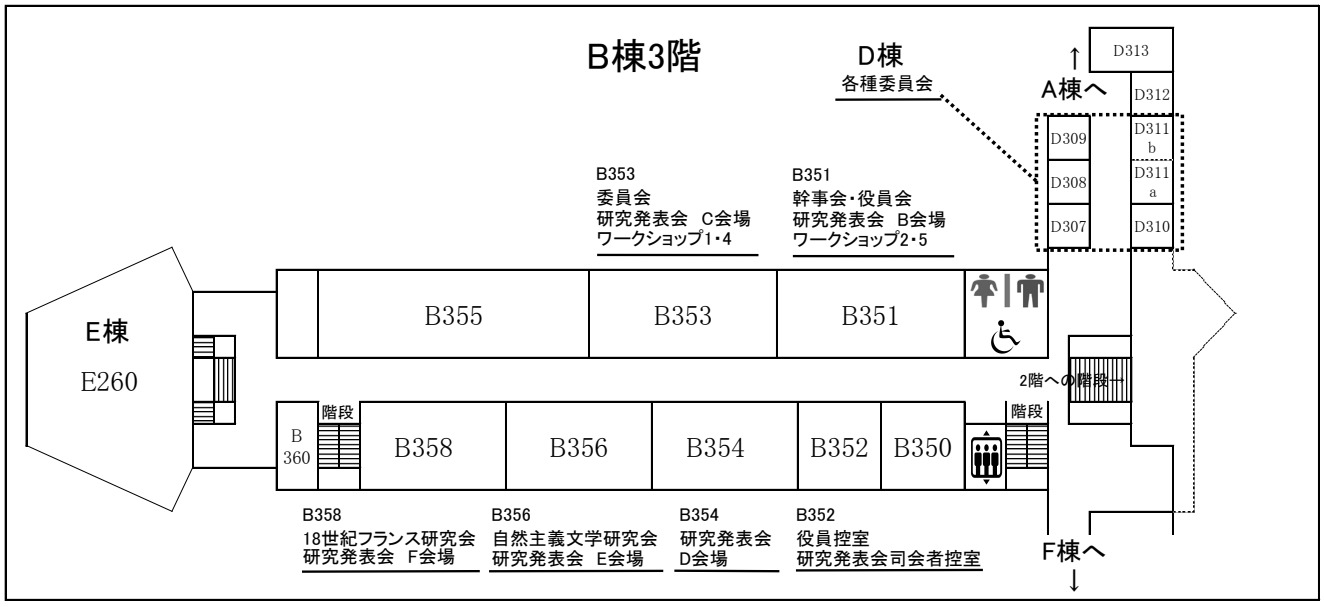
利用をご希望の方は下の「託児利用規約」をお読みになり、理解・同意の上、お申込みください。

日本フランス語フランス文学会 2018 年度秋季大会における託児サービス利用規約

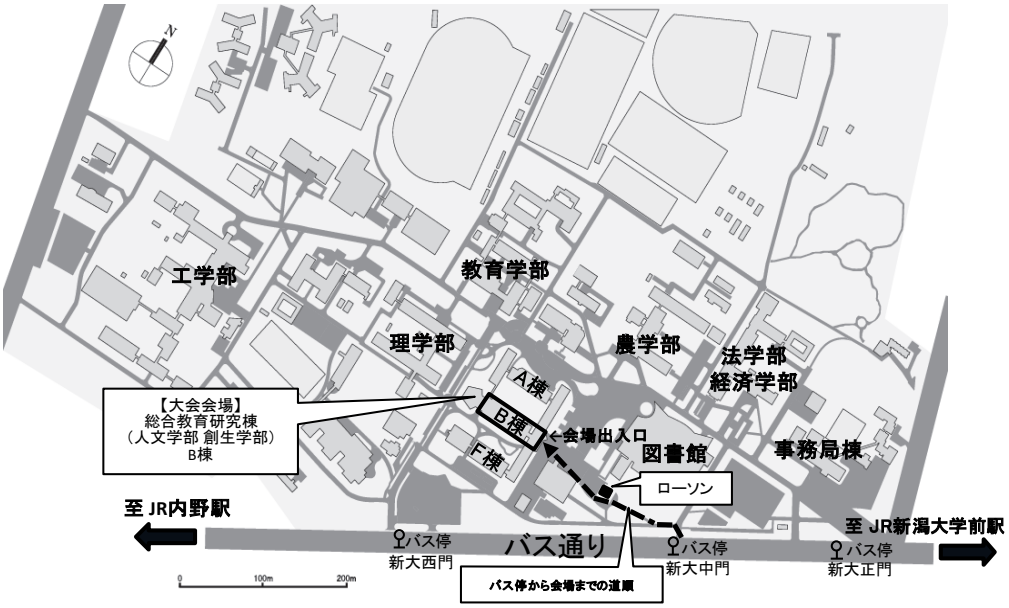
ご利用資格	日本フランス語フランス文学会 2018 年度秋季大会に出席する学会員を保護者とする生後 3 か月～小学校 6 年生までのお子さま
料金	お子さま 1 人あたり 1 日 1,000 円
ご持参いただく物	①　お子様の保険証のコピー（封筒に入れ、封をして記名下さい）。 ②　「お子様について」「託児利用同意書」（ﾍﾞﾋﾞｰｼｯﾀｰ業経営者賠償補償）ご記入ご捺印の上、利用初日に必ず託児スタッフにお渡し下さい。 ③　学会参加証　託児サービスを申し込まれた方に当日受付でお渡しします。 ④　お子様に応じて必要なものをご持参下さい。 粉ミルク、哺乳瓶（時間内にて使用本数）、お湯（適温） おやつ（チョコ・こんにゃくゼリー・ガム不可）・飲み物 着替え・おむつ・お尻拭き・ビニール袋数枚・タオルハンカチ等
おやつ等	食事、おやつ、お飲物はすべてご持参になったもので対応いたします。
お願い	①　お子様の手洗いを済ませてから、ご入室下さい。 ②　ご病気の場合（38℃以上の熱、嘔吐やひどい下痢の症状がある等）は原則としてお預かりすることはできません。 ③　軽微な疾病等についてはシッターと保護者の相談の上で判断して頂きます。保育スタッフによる投薬はいたしかねます。迅速な対応をお願い致します。 ④　緊急の場合は、携帯電話によってお呼び出し致します。 ⑤　投薬が必要な場合は、保護者の責任で行って下さい。 ⑥　迎えの時間は厳守して下さい。当日の託児時間の延長や時間変更はできません。 ⑦　持物にはすべてお名前をご記入下さい。記入の無いものにつきましては、当社では責任を負いかねます。
変更・キャンセル	10 月 26 日（金）正午までに上記の大会実行委員会アドレスにご連絡下さい。
保険	①　万が一の場合に備え、弊社加入の損害保険で対応させて頂きます。シッターの過失以外の原因、不可抗力の場合はこの限りではありません。 ②　日本フランス語フランス文学会ならびに新潟大学は責任を負わないことを了承願います。ご理解の上、当日ご持参いただく「託児利用同意書」に署名・捺印をお願い致します。
委託業者の連絡先	株式会社 POPO　　担当：長場（ながば） Tel：025-275-5562　　E-mail：info@po-po.net

大会会場（新潟大学五十嵐キャンパス総合教育研究棟Ｂ棟）教室配置図

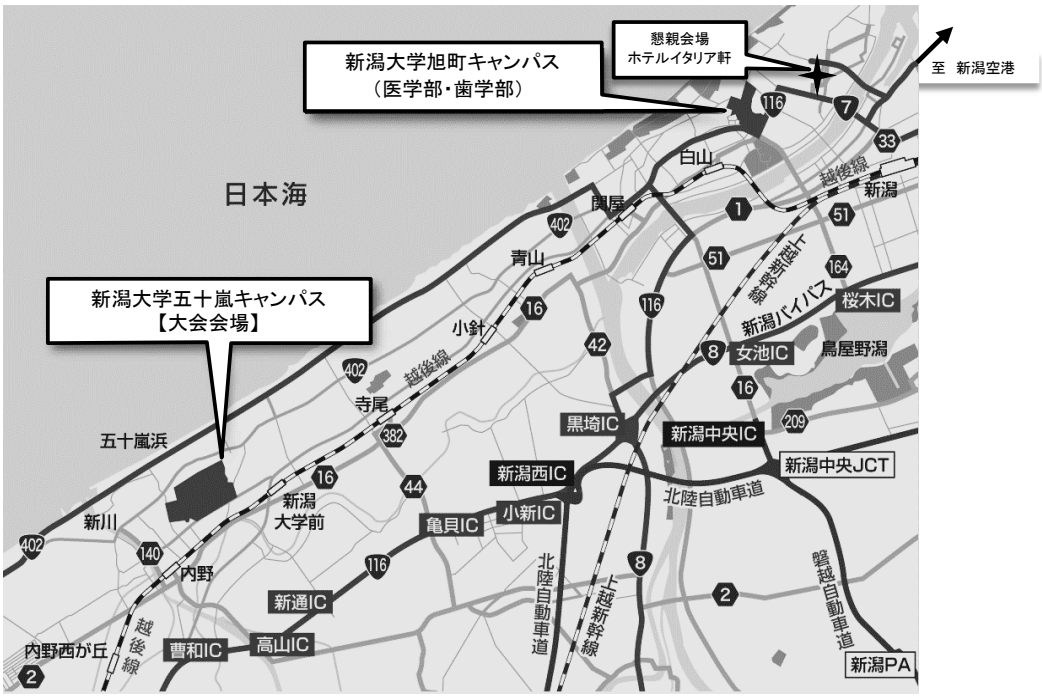




新潟大学五十嵐キャンパス地図



新潟市内概略図



会場へのアクセス

<u>新潟駅から</u>

▸【バス利用】：新潟駅前万代口バスターミナル 5 番乗り場より、
「W21 西小針線〈西小針経由〉新潟大学ゆき」または
「W21 西小針線〈西小針・新潟大学経由〉内野営業所ゆき」
に乗車し、「新大中門」で下車（所要時間約 45 分、両路線あわせて土日は 1 時間に 3～4 本運行）、バス停から大会会場まで徒歩約 3 分。

▸【タクシー利用】：約 30 分。

▸【JR 利用】：越後線に乗車、新潟大学前駅か内野駅で下車（所要時間約 20 分、土日・平日とも 1 時間に 3 本程度運行）、新潟大学前駅から新潟大学五十嵐キャンパスまで徒歩で約 20 分。内野駅から五十嵐キャンパスまで徒歩で約 20 分、タクシーで約 6 分（内野駅にはタクシー乗り場があります）。

<u>新潟空港から</u>

▸【バス利用】：「新潟駅南口」ゆきリムジンバス（所要時間約 25 分、土日・平日とも 1 時間に 2～3 本運行）、新潟駅前で乗り換え。
「新潟駅万代口」ゆき路線バス（所要時間約 33 分、平日は 1 時間に 1～2 本、土日は 1 時間に 1 本程度運行）もあります。

▸【タクシー利用】：新潟大学五十嵐キャンパスまで約 40 分、新潟駅まで約 20 分。

以下の新潟県ならびに新潟市の観光情報サイトもご活用ください。
・県公式観光情報サイト「にいがた観光ナビ」 http://www.niigata-kankou.or.jp/
・新潟市「Welcome to niigata city」 https://www.nvcb.or.jp/
・新潟市グルメガイド「ようきなった」 https://www.the-niigata.com/youkinatta/